

---

# IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

### 【Nコード】

N7031Y

### 【作者名】

起源はきつと厨二病の人

### 【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

## プロローグ的な(前書き)

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまいましたが暖かい目で見守ってくださいとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの〇〇じゃないなどといったものがあると思いますがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします(汗

それでもよければぜひともご覧ください

## プロローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップを試してみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もつらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかった、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してPSS3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て(？)から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

(それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・?)

などと思っただけでも実際に体に怪我などをしてるわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f a を始める リリウムたんマジ可愛いよ テレビからなぞの光が！ 知らない天井だ 俺、若返りました 今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前に来た

横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLE  
TEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

(なんか開いちゃったよ！)

そしておそろおそろ入っていくとそこにあっただのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言つとため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

## プロローグ的な(後書き)

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

## 第1話（前書き）

すみません今回も駄文です；；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれないがそこら辺はご了承ください



## 第1話

### 第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音をしたらほうをみてみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主と書いてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に来たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末にを取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこつちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじまったかと思っただぜ」  
ガハハつと相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいななんかあったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かっただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

(どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな)

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

(それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだな)

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言った  
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容を見た

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえませんが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安だな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがゴジマなんかやらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？できたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7〜8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらおう」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカツと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というとレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N I O H 左腕武装に W L O 2 R - S P E C T E R というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうか・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声が出た

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなじゃ最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もっといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中の中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWLO2R - SPECTER をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

(後はこいつを破壊すれば終わりか・・・)

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

(これで終わりか・・・)

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた(俺が殺した・・・この手で俺が)

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWLO2R - SPECTER でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」  
そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにはしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急いで胃の中のものをごみ上げてきて嘔吐してしまった

(これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった



## 第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいましたがお許しを

そついや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

## 第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（ ; ）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗  
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を  
出してみましたか・・・なんというか

## 第2話

### 第2話

あの初(？)の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

(また、依頼か)

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやとったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

(伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？)

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「……」

「ん？どうした」

「……っああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらしないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男 side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末から pipipi と鳴るとレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

(スウェーデンというと北欧のあたりか?)

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見つめる

(なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行つて合流するでしょう)

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた  
そして自分の僚機になる者に合流をしいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところだがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

(この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか?)

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな?」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

(まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな?)

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな?)

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているよな印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないよな気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない」

こちらこそなんか怒っているみたいだな印象を与えてしまったようだすまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をくらい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちら也开始する」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

(二回目の戦闘だつて言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな)

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思つた瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思ひあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

(なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに！？)

と思つていと通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思つてお前らの情報売つて安全を保障することにしてもらつたんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになつていいるからな、まあ運が悪かつたと思つてあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言つと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だつたなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリート俺が葬つてやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑つて言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送つた

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

アーマードコア・ネクスト

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせるレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしないうとするとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇る存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」

それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバードブーストをふかし去っていくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが



打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしゃがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言うと

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、ア  
ンジエてめえらはこいつとさつき逃げた奴には手を出すなよ！俺が  
始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

(これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？)

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！！」

その言葉と同時に04・MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部  
が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃  
げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイ  
ジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソー  
ドでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って  
最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そついうと彼は右手から04・MARVEをすてて左手の02・D  
RAGONSLAYERだけとなった

(下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で  
頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはでき  
たわけだ)

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に  
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そっぴいこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か  
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにPAフラインガルアーマーなどがあっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージしてOBオーバードブーストをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02-DRAGONS LAYERを振るった

だが02-DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、なぜならば02-DRAGONS LAYERはほかのレーザーブレードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握できてない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレイジはとまらずに

「おおおおおおおおお！！」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOSHを撃ち込むと

「ガアアああアアあああ！！」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しんでいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOSHを3回撃ち込むと赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

(これでもう戦うための武装は無いな、だがレイヴンが逃げること

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行つかのように立っていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな  
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いいや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく  
のはもつと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの  
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると  
アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃  
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと  
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな  
と加えて言った

それを聞いたベルリオーズは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放  
したのであった



## 第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジエ、4の主人公はこんなんじゃないねえ！

と思われるかも知れませんがそこから辺はつつこまないでくれるとありがたいです（・・・；）

そして次も頑張りたいと思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

---

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年11月21日21時41分発行